



陵とレイジから聞いた
麻木コーチが
依怙鼻肩してるって
富士谷コーチに
チクったんだってな



でもまあ
あいつのことだ
放つときゃそのうち
元に戻るだろ

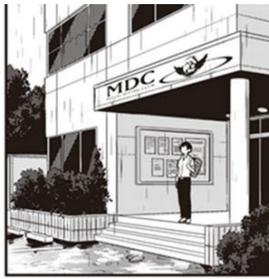
レイジは言い過ぎたって
思ってるみたいだけど...
陵はまだ拗ねてる



東京で
中2の男子で
飛び込みの痛みを
知ってるのって...
もうぼくだけ

だから二人とは
特別な何かで
繋がってるって
ずっと思ってた

...三人だけ
なんだよね



うまくいかない
なにもかも...



折りたたみ傘
忘れた...



...先着一名

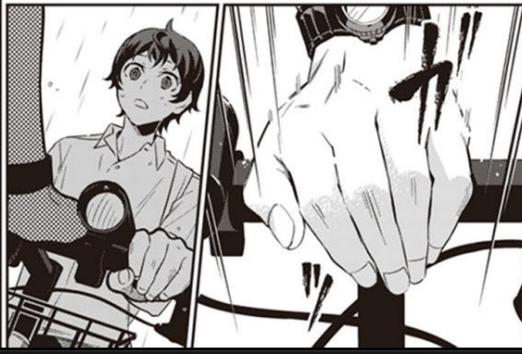


…でも仲間の
気持ちだって

スポーツは常に
勝ち負けがついて回る
誰だってそんなの
承知でやってんのに…
勝つ度にそうやって
落ち込む気か？
お前は



いいか
トモ



「大事だから
もうやめる」
…とか
言うなよ



…え
…特別だったから
余計悔しいんだろ
あいつらも



そんな「人」に
そっぽ向かれた…
だから余計
シロツクなんだ



「お前だけが違う」って
思えたんじゃないのか



かも…しれない
ほくも最近
舞いあがってた
そこんところは…
反省してる



「反省」か
甘いなお前も
甘い？

お前はただ
勝ったただだ

麻木夏陽子は
陵やレイジより
お前の飛び込みに
目をつけた



「事情はレイジからきいたよ。いやみなこととして悪かったって、レイジも反省してる。陵はまだすねてるみたいだけど、あいつのことだから放っときゃそのうちもともどるだろ。しかしおまえもさ、小学生じゃねえんだから、**①こんなこと**でサボるなよ、練習」

代々木公園の十分の一もない白山公園は、桜ではなく若芽の緑を夕映えに照らしていた。

今日は公園に縁がある日だと思いつつ石門をくぐった知季は、木陰のベンチに浅く腰かけた要一を見つけた。

「たった三人なんだよね」

知季は要一と肩を並べ、黒いフードつきパーカを脱いでかたわらへよせた。それからおもむろにつぶやいた。

「三人だけなんだよ、今、東京で飛びみやってる十三歳の男って。ぼくとレイジと陵だけ。それって、すごいことじゃん。同い年なんて何万人もいるのに、その中でぼくたち三人だけがまだ飛びみが続けてる。十メートルの台から水に体を打ちつける痛みを知ってる……」

失神したまま水に吞まれる苦しさ。みるみる腫れていく肌。飛びこむたびに強まる耳の奥の痛み。つきまとう腰痛——。

「だから特別と思ってたんだ。性格はみんなバラバラだし、陵なんかとくに飛びみ以外でつきあいたいとは思わないけど、でもやっぱりぼくたちは特別な何かでつながってると思ってた。だから、その二人にそっぽむかれてよけいにショックだったんだけど……」

知季の語尾が鈍り、「でも」と再び強まった。

「でも、たった三人だから、あいつらもよけいにくやしかったんだろうな。ぼくもこのごろ舞いあがってて、二人の気持ちまで考えてなかったし、そのへんは反省してるよ」

「反省、か」

要一はふふんと鼻を鳴らした。

「②甘いな、おまえも」

「甘い？」

「おまえはただ勝っただけだ。麻木夏陽子は陵やレイジよりおまえの飛びみに目をつけた。おまえの素質を買ったんだ。スポーツにはつねにそうした勝ち負けがついてまわる。だれだってそんなの承知でやってんのに、おまえは勝つたびにそうして落ちこむ気か？」

「いや、勝負は勝負だけど、でも中間の気持ちも……」

「③いいか、トモ」

知季の声をさえぎり、要一が瞳を波立たせる。ふだんはクールな彼がこんな目をするのは飛込みの話をするときだけだ。

「いつかどでかい会場で十万の観衆をわかせたいと思うなら、そばにいる一人や二人のことは忘れろ。いちいち身近な人間に気を配ってたら、十万の観衆をわかせるエネルギーなんか残らないぞ」

陽が完全に沈んだのか、空の紅が夜の群青に侵されはじめた。織物がほつれるように少しずつ、少しずつ薄らいでいく。

知季は要一の言葉を頭で反芻し、④ふっと口もとで微笑した。いちいち身近な人間に気を配っていたら、十万の観衆をわかせるエネルギーなど残らない。そう言いながらも身近な知季のことをこうして気にしている要一がおかしくて、うれしかった。

「ぼくは要一くんみたいにはなれないけど、でも飛込みは続けるよ。レイシヤ陵とはどうなるかわかんないけど、とにかくがんばってみる」

とにかくがんばる。三日も悩んだ末、知季がだした結論はこんなものだった。

とにかくがんばる。とにかくがんばる。とにかくがんばる。

いかにも単細胞っぽい結論だが、恥じらわずにくりかえせばそれなりの元気はわいてくる。

「ま、とにかくがんばれよ。おまえが飛込みやめたら、おれも張りあいなくなるし」

要一はさらりと言って、左手のダイバーズウォッチに目をむけた。

「なあ、トモ。おまえ、まだ時間あるか？」

「ひん、あるけど」

「じゃあマックでも行こうぜ、おれがおごってやる。ちょっと話があるんだよ」

言いながら要一はすでに立ちあがり、門へと足をむけている。

設問1

①登場人物の名前を整理せよ



設問2:「①こんなことではなるなよ、練習」とありますが、「こんなこと」とはどんなことですか。最も適当なものを次の中から選びなさい。

ア:知季だけがコーチから認められたことで、ほかの二人の仲間に反感を買い、それがショックだったこと。

イ:東京で飛び込みをやっている13歳の男子が自分たち参院だけであることに改めて気づき、その重圧に耐えられなかったということ。

ウ:飛び込みを通して互いの気持ちを理解しあっていた二人の仲間から冷たくあしらわれショックだったこと。

エ:自分だけがコーチから認められたことはうれしかったが、ほかの二人の仲間の気持ちを思い、心から喜べなかったこと。

設問3:「②甘いな、お前も」とありますが、知季の甘さはどこにあるのですか。「スポーツ」「仲間」の二語を必ず使って、50字以内で答えなさい。



設問4：「③『いいか、トモ』と瞳を波立たせる」とありますが、この時の要一の気持ちとして最も適切なものを、次の中から選べ。

ア：知季に自身の素質を自覚させることで、彼が自信をもって練習に励むことを祈っている。

イ：知季に勝負の厳しさを教えることで、彼がそれに打ち勝って強い選手になることを期待している。

ウ：知季の考えの甘さを指摘することで、彼がますます自信を無くしてしまうのではないかと心配している。

エ：知季の優しさを否定することで、彼がもっと図太く生きていくことを期待している。



設問5：「④ふっと口元で微笑した」とありますが、知季は何がおかしかったのですか。

「矛盾」の言葉を必ず使って、800字以内で答えなさい。



矛盾しているじゃん
要一くん

ありがとう



まあいい
それより...
これ見てみる

お前のせいで
聴かいただろが
マ...めん...

「2010年8月29日、
青森県沖で小型漁船が
台風十九号に襲われ転覆」
乗船していた
沖津白波さんと
長男の大海さんが
死亡...

「天才ダイバーの死」?

アイスコーヒー
Mひとつ

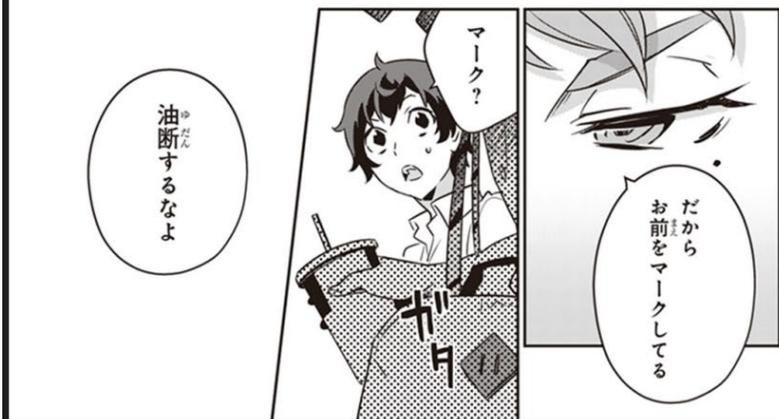
じゃあ
おごってやる

え
それだけ?
バーガーは?

まさか!
ダイバーがこんなもん
頼むわけないだろ
あ...
アイスティーM...
...お前
食う気だったな

え
ちよちよ
要くん!
こんな高カロリーの
かたまり食うなんて
ありえないだろ!
ったく! ちゃんと
カロリーコントロール
しろよ
ザッ
ザッ
ザッ





前のマックには陸トシの帰りにときどきよっていた。ふだんは間食を控えている知季も、レイジや陵が一緒のときだけはつつい気がゆるみ、禁断のハンバーガーに手をだしてしまったりする。知季は要一の話より、要一でもときにはハンバーガーを食べたりするのだろうか、という点のほう気が気になった。一人して自転車を走らせ、学生たちで混みあう店内に足を踏み入れる。

要一がカウンターで「コーヒー」とだけ注文したとき、**知季はかすかな敗北感を覚えた**。「ご一緒にポテトはいかがですか」の誘惑をきっぱり拒んだときには、かなりの自己嫌悪も感じた。飛び込み仲間たちが要一を「ドライ」だの「つきあいにくい」だのと敬遠するわけは、意外とこうした日常の積みかさねにあるのかもしれない。

しかし、チープな油の匂いが染みついたテーブルで要一がはじめた話のほうは、思いのほか興味深いものだった。

「おまえ、麻木夏陽子がここんとこ顔をださない理由、知ってるか?」

「青森に行ったんでしょ」

「だから、**その目的**だよ」

「さあ。大事な仕事とか言ってたけど……。あ、でもなんか、おみやげ持って帰るとか言ってたな」

「おみやげ?」

「ライバルがおみやげよ、とかなんとか」

ライバルがおみやげ。口にだすと滑稽に響くが、要一は笑わずに考えこんでいる。

「要一くん、なんか知ってるの?」

知季が尋ねると、要一は「ここだけの話だぞ」とひじをせりだし、

「津軽の沖津だ」

と一言、厳かにささやいた。

「ツガルの……オキツ?」

「ああ、おれの勘が当たってれば、麻木夏陽子がおまえのライバルに仕立てあげようとしてんのはその男だよ。沖津飛沫。十六歳。幻の高校生ダイバーだ」

幻の高校生ダイバー、沖津飛沫――。

知季がこの名を耳にするのは、正真正銘、このときが初めて

だった。にもかかわらず、この名はただ風変わりだからというだけではなく、もっと本能的に知季のどこかを刺激した。要一がこのききなれぬ名を口にした瞬間、知季はなぜだか自分の中に熱いものを感じて、アイスティーの紙コップを両手でぎゅっとにぎりしめたのだ。

紙のボディがへこんで、掌にリアルな氷の感触が伝わってくる。

要一の語る未来のライバルの話をききながら、**知季は指先が麻痺するまでずっと、そうして薄紙を隔てた氷を抱いていた。**

設問1:「かすかな敗北感を覚えた」とあるが、それはなぜか。



設問2:「その目的」とあるが、その内容を説明せよ。

設問3:「知季は指先が麻痺するまでずっと、そうして薄紙を隔てた氷を抱いていた。」とありますが、

①「薄紙を隔てた氷を抱いて」という表現について、これは具体的にはどのような状態を表現した比喻ですか。空欄に入る言葉を本文中から11文字で抜き出さない。

□□□□□□□□□□□□□□を握りしめている状態。

②このときの知季の気持ちを、そうなるに至ったきっかけも含めて説明しなさい。

